

四国地方における尖頭状礫器出現期をめぐる一考察 － 愛媛県西山奥谷遺跡発見の最新事例をもとに－

幸泉満夫

1. はじめに

本稿は、縄文時代後期初頭への帰属が明確となった一個の尖頭状礫器を契機に、四国地方への同種の礫器類導入に至る経緯について、若干の考察を試みようとするものである。

2011(平成23)年、現在の愛媛県今治市と松山市の境界にほど近い旧菊間町(現今治市)の山間で、中津I式成立期段階¹⁾に相当する良好な遺物群が纏まって出土した。西山奥谷遺跡である。

対象資料は、翌2012年の報告書で石核と認定されていたものである(眞鍋・池尻編2012,p23:図15-88)。この種の石器は九州地方を中心に「尖頭状礫器」、「尖頭状石器」、「鉤様石器」、「双・单頭状(式・形)石器」、「双角状(式・形)礫石器」、「嘴状礫器」、「えぐり入り礫器」、「打製靴型石器」等と様々に呼称されてきたが、未だ名称統一、包括的研究ともに成されていない。次節で示す通り、当該器種の態様が多彩に亘るものもその理由の一つであろうが、少なくとも一部の形態的特徴のみを示唆する呼称は好ましくないだろう。

いま、改めて内容を整理し、その定義化を試みるならば「尖頭状の刃部を一箇所から複数箇所作出了した縄文～弥生時代の石器のうち、全長5～15cm程度と石錐の倍以上の大きさを呈し、かつ、準硬質の頁岩や砂岩、安山岩、玄武岩、ホルンフェルス等の主に扁平円礫素材から成る敲打具」といった表現になろう。本稿では上記敲打具に対する総称として、別途頻用される縄文草創期～早期の「尖頭(状)石器」とも区別する意味でも、「尖頭状礫器」(橋1967、高野1980)の呼称を改めて採用したい。

以下では本稿の目的を明らかにするため、まずは尖頭状礫器に関する学史から紐解いていこう。

2. 関連学史と本稿の目的

(1) 学史抄

1953年、大分県日出町の早水台遺跡で、八幡一郎、鏡山猛、江坂輝彌、賀川光夫等による第一次、第二次学術発掘が実施された(八幡・賀川編1955)。その際、早期押型文期の遺物包含層より「礫核石器」と称される略彫状の、鋭い尖頭部を作出した握り槌形の礫器が合計5点出土している(写真1)。掌大の楕円形自然礫の一部を大きく打裂して刃部を剥出する点に特徴が見出せよう。当時、既に南関東で注視されていた稻荷台系のPebble-toolや、和歌山県高山寺貝塚出土の早期礫器群との関係が示されたが、この段階ではまだ類例の提示のみで、具体的な機能用途にまでは言及され

◎ 愛媛大学法文学部准教授 幸泉満夫(KOIZUMI Mitsuo)



写真1 大分県早水台遺跡出土の礫器
(別府大学附属博物館蔵/幸泉撮影)

おこすことには非常によい」だろうと想定されたのである(橋1967,pp99-101)。これを受け、賀川光夫も改めて早水台遺跡出土の縄文早期におけるChopping-tool様礫器について「打ち割ることにより、おこし、返す道具」とするのが適当と論じ、「漁撈具と推定される」と補足するようになった(賀川1969b,p271-273)²⁾。

一方1968年には、岡本健児も愛媛県押鷹山貝塚(弥生後期)で出土した尖頭状礫器を「鉤様石器」と呼称し、伴出する多量の牡蠣殻の存在を鑑み、カキの採捕具兼処理具であろうと、橋等とほぼ同様の可能性を指摘している(岡本1968)³⁾。

同年には別途、江坂輝彌が熊本県宇土市轟貝塚の縄文中期貝層(阿高式期)出土の尖頭状礫器を「打製靴型石器」と仮称し、中国浙江省出土の靴型斧との類似性から、愛媛県笛ヶ滝遺跡出土の十字形石器とともにツルハシ様の土掘具の可能性について論じており(江坂1968)、当時はまだ見解が分かれていた。もっとも江坂の土掘具説は、のち松藤和人によって明確に否定されている(松藤1987)⁴⁾。

1973年には、長崎県江湖貝塚の貝層中より曾畠式に伴って尖頭状礫器が複数出土した。橋や賀川の予察とも呼応し、こうした礫器が少なくとも縄文前期までは遡る可能性が浮上してきたのである。報告書では坂田邦洋により、やはり「海産物の捕獲のために作られたもの」と記されている（坂田1973,p21）。

これら急増する諸例を受けて1975年、山崎純男は当該礫器の性格について一層具体的に論じた。すなわち西北九州の縄文中期～弥生時代を中心に分布し、形態も、短頭形のほか双頭状などバラエティーに富むとして、主に岩礁性貝類の捕採と処理具としての機能を想定したのである（山崎1975,p151ほか）。

同じ年には、愛媛県域でも木村剛朗が高縄半島の先端、今治市(旧波方町)の水崎(大角鼻)遺跡

採集資料を報告した際に1点、平面略三角形を呈した讃岐岩質安山岩製の三頭系礫器(筆者註: 単頭系と双頭系の機能融合形)の存在を見出している(第1図)。氏も「貝の身の取出しに、また岩にくついた貝(カキ)等を剥ぎとるに用いられたものと推定する」等と、積極的な評価を加えている(木村1975,p31-35)。ただし表採資料であり、概ね縄文前期後葉(里木I式)~後期前葉(福田K2式)までの時期幅のなかでしか、評価は叶わなかった⁵⁾。

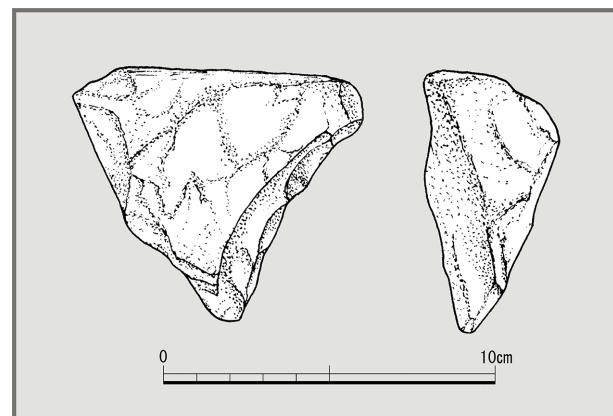
1978年には天草市に隣接した鹿児島県出水市の荘貝塚で緊急発掘が実施され、縄文前期前半の轟B式~曾畠式に伴って単頭系2点、双頭系6点が出土する(池水ほか編1979)。さらに同年、長崎県対馬の越戸尾崎遺跡でも縄文早期後葉~前期中葉に属する尖頭状礫器が複数出土している(坂田編1979)。先の長崎県江湖貝塚の事例も踏まえるならば、臨海部における尖頭状礫器の出現は縄文前期の前半段階にまで遡り、かつ、出土当初より九州の西海岸域に広く分布していたことが確実視されるようになったのである(後節第5図参照)。

1982年には長崎県堂崎遺跡の報告書を纏めた町田利幸が、尖頭状礫器の出土地点として63箇所の関連遺跡を掲げた。さらに長崎県今福遺跡(弥生後期)の報告書では形態、製作技法について、より精緻な検討を加えている(町田編1982・1984)。ここで町田は尖頭状礫器90点以上を対象に最大限の図化と計測表を提供するとともに、それらの形態的特徴から新たにI~IV型の大別案を示した。さらにI型を二分、III型を三分した合計7形態の型式分類を試みている(町田編1984)。このほか1987年には松藤和人も島原半島周辺の尖頭状礫器を対象にI~IV型の分類を行っている(松藤1987)。

同じ1980年代には熊本県天草諸島の一角、五和町沖ノ原遺跡の調査報告書も刊行され、縄文後期に相当する多量の尖頭状礫器が報告された。うち第1次調査では地元漁師の実験成果から、同礫器群の用途として具体的にアワビオコシの可能性が提起されたが(隈編1984)、これにはち松舟博満が疑問を呈し、追加実験を実施している(富田・松舟編1989,p75)。その結果、尖頭状礫器のうち双頭系に関しては、岩礁に付着するカキをその弯曲部に当てて叩くことで両尖頭部がストッパーの役割りを果たし、カキ殻を破碎させることなく採捕できることを発見し、改めて「カキ打ち説」を追加している。

山口県東部、周防灘に面した熊毛半島先端の上関町田ノ浦遺跡では、2005年度以降の大規模緊急発掘のうち、浜堤北側に相当する20・21年度調査区でのみ合計200点以上という膨大な数の尖頭状礫器が出土し、その意外性から関係者達を驚かせた(谷口編2011)⁶⁾。西瀬戸内では、唯一纏まつた出土事例もある(写真2)。

2009年には第19回九州縄文研究会が長崎県大村市で開催され、九州各県の漁撈関連遺物が一同



第1図 愛媛県水崎遺跡出土の尖頭状礫器

(木村1975より再編)



写真2 山口県田ノ浦遺跡出土の尖頭状礫器
(山口県埋蔵文化財センター蔵/幸泉撮影)

研究室編2009・2010)。村上恭通は愛媛大学考古学研究室のゼミ活動の一環として主に九州の長崎県今福遺跡(弥生後期)と熊本県沖ノ原遺跡(縄文後晩期)の調査を実施し、拝鷹山貝塚出土の礫器が「沖ノ原遺跡例に近い様相をもつ」と評価している(村上2009,p96)。しかしながら、弥生時代後期と縄文時代後晩期とでは時期的な隔絶性があまりにも大きく、一方では「容易に関係づけることができない」とも結んだ(村上2009,p98)。同報告書では児玉洋志が使用痕分析も実施している。何れもカキ捕採に関わるものとしつつも、握部における摩耗痕の態様から礫器の持ち方には2パターンが存するという興味深い観察結果を纏めている(児玉2009)。

直近では2015年、多田仁が西南四国域を対象に、改めて縄文時代の関連礫器類(より積極的に貝類採捕具と表現)について考察を行っている(多田2015)。ここでは愛媛県平城貝塚出土の石斧形礫器類(平城1類石斧)が一般的な磨製・打製石斧とは特徴が異なること、他の周辺遺跡に類例を見出せないことを理由に、新たに岩礁棲貝類の採捕具として評価を加えている。もっともその論拠は何も示されていない。魅力的な仮説ではあるが、その証明のためには今後、使用痕実験や付着物分析を含めたより客観的な論証が不可欠となろう。

(2)本稿の目的

以上のように縄文、弥生時代とも、関連資料の蓄積は著しく、四国地方でも、折に触れて関連石器に対する検証が重ねられてきた。しかしながら発信源と予想される九州西海岸側との関係すら依然、不明瞭なままというのが現状である。今後の研究進展のためには、特に、四国における出現経緯の解明が急がれるところであろう。近年、多田も指摘するように、尖頭状礫器は粗製ゆえに特にバリエントが豊富とみられるが(多田2015)、かつて愛媛県拝鷹山貝塚の考察でも結論が難航してしまったように、縄文～弥生時代に至る関連石器群の範疇と統一的な分類基準が未整備のまま、部分的な評価のみを目指しても困難といわざるを得ないだろう。そうした過去の学史を踏まえるならば、まずは体系的な分類基準の設定と、四国地方における出現期の様相に焦点を据えた考察が必要不可欠であろう。

に集成される機会を得た。これにより改めて尖頭状礫器が九州西海岸に集中すること、その出現が縄文前期初頭の轟式前後で、当初より单頭系と双頭系が共存する可能性が高いこと、さらに縄文中期後葉～後期初頭の時期に再び増加傾向を示すとともに、九州各地への拡散傾向が読み取れる等の実態が把握できるようになった(九州縄文研究会編2009)。

同じ2009年には愛媛大学法文学部考古学研究室も愛媛県宇和島市の拝鷹山貝塚(弥生後期)の調査を契機に同系列の礫石器類に関する考察結果を公表している(愛媛大学考古学

もっとも本稿では紙幅の都合もあり、上記全ての解決を図るわけではない。ここでは縄文～弥生時代の様々な出土事例に基づいた網羅的な分類基準の提示のもと、四国地方における出現期前後の広域分布図を示し、その伝播経路を解釈することで、四国の尖頭状礫器に対する新たな議論の提供を目的としたい。

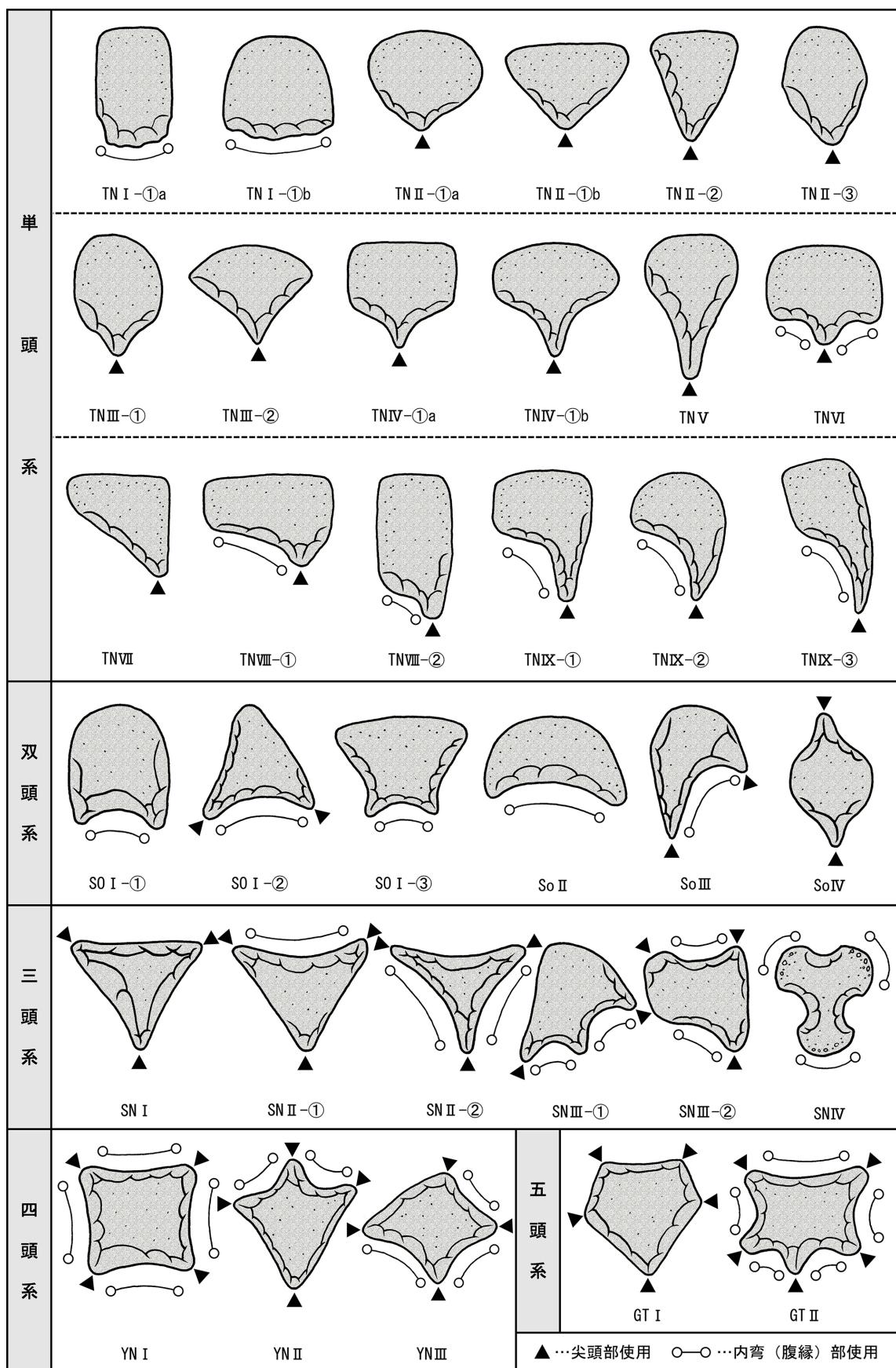
3. 分類体系

第2図は、尖頭状礫器の範疇に属すると判断される縄文～弥生時代の関連石器を網羅的に集成のうえで、その平面形態をもとに、分類体系を試行したものである。まず刃部を意味する尖頭部の数から「单頭系」「双頭系」「三頭系」「四頭系」「五頭系」の5系統に大別した。このうち数およびバリエントが豊富なのは单頭系と双頭系である。四頭系と五頭系は山口県田ノ浦遺跡や熊本県椎ノ木崎遺跡(富田・松舟編1989)で数例が知られる程度の稀少種である。

【单頭系】第2図上段に掲げるよう、さらにTN I～TNIX群に細別できる。TN I群は掌サイズの橢円礫の一端を打欠き刃部とする例のうち、尖頭状の加工を意識しない一群。形態分類上、厳密には尖頭状礫器の範疇には属さないものの、系列上、今回は分類基準に含めた。熊本県椎ノ木崎遺跡等で散見される。TN II群は橢円礫の一端を直接ないし不整形に尖頭状に加工する礫器。つまりは尖頭部が突出しない一群である。対するTN III～V群は尖頭部が突出する例である。図示するように突出部の度合いによりIII、IV、V群とした。V群は嘴状と称される一群で、熊本県沖ノ原遺跡のほか、近年では山口県田ノ浦遺跡でも多数出土しており、縄文後期での出現が確実視される。TN VI群は突出する尖頭部に加えその両脇に弯曲部を形成し、併せて敲打を行う例。後述の双頭系SO I～III群との折衷を示す一群で、数は少ない。熊本県椎ノ木崎遺跡等に事例がある。TN VII～IX群は礫の長軸ないし短軸の一端に突出した尖頭部を設ける例。うちTN VIII、IX群は弯曲部も敲打する折衷型である。TN IX群は尖頭部が長く鉤状(靴型)に弯曲する一群である。弥生時代後期に多いタイプだが、熊本県沖ノ原遺跡(縄文後期)等にも類例が窺える。

【双頭系】第2図四段目は尖頭部を二箇所作出する双頭系である。SO I～III群は礫の両端に短小の鈍い尖頭部を二箇所配置する例で、原則として、両者の間の内弯(腹縁)部を敲打して使用する。前節の学史でも触れた通り、縄文前期の出現当初より存在している。なおSO IV群は異端で、尖頭部を上下両端に作出する例である。松藤和人による分類のIV型に相当する(松藤1987)。使用痕は先の单頭系と同じく尖頭部のみである。長崎県堂崎遺跡や愛媛県通り山遺跡等、縄文晚期～弥生後期の間で散見できる。

【三頭系】第2図五段目は尖頭部が三箇所認められる、三頭系である。SN I群は各尖頭部間に内弯(腹縁)部を設ける例。対するSN II群は、先の单頭系と双頭系が一個体内で融合する例である。ここでは内弯(腹縁)部の数から①～②までの亜型式を設定しておく。SN IIIは刃部が二股状を成し、基部側の尖頭部にも使用痕が認められるタイプ。SN IV群は異色で、各頭部が広く、円礫面をそのまま敲打する例である。稀有であるが、熊本県黒橋貝塚等で散見される。



第2図 尖頭状礫器群の分類

【四頭系】第2図最下段の左下枠には、短小の尖頭部を四箇所作出する四頭系を掲げた。いずれも数的には稀少である。形態的にYN I～Ⅲ群に分別した。YN I群は(正)方形、YN II群は菱形、YN III群は不定形で、いずれも一個の石器に複数箇所の尖頭部と内弯(腹縁)部が設けられる折衷型である。

【五頭系】第2図最下段の右下枠に設けた五頭系も同様であり、数的には一層稀少となる。平面略五角形の例をGT I群、不定形をGT II群とした。なお、今のところ尖頭部を六箇所以上設けた事例は確認できていない。

以上が、今回試行した分類体系である。基本は单頭系にみる尖頭部一箇所を刃部とするタイプと、双頭系にみる弯曲部を敲打用に使用するタイプの二者である。前者は尖頭部の突出、嘴状や鉤状への発展という型式学的変遷も想定できよう。さらに両者の折衷型や、それらの刃部を複数箇所に設けるタイプとして三頭系～五頭系が派生していると見做すことができる。これらは单頭系～双頭系と併行関係にあるが、その出現は、概ね縄文中期後葉～後期初頭とみることができよう。以降、少なくとも縄文晩期まで両者は併存している。

以上の分類体系を念頭に、つづいて、本題となる愛媛県西山奥谷遺跡出土の礫器について検討してみよう。

4. 西山奥谷遺跡出土礫器の観察

写真3、第3図は西山奥谷遺跡第VII層出土の尖頭状礫器である。全長5.9cm、全幅8.0cm、最大厚21mmで、重量は76.40gを測る。素材は、安芸灘周辺で散見される讃岐岩質安山岩(石井2009、眞鍋・

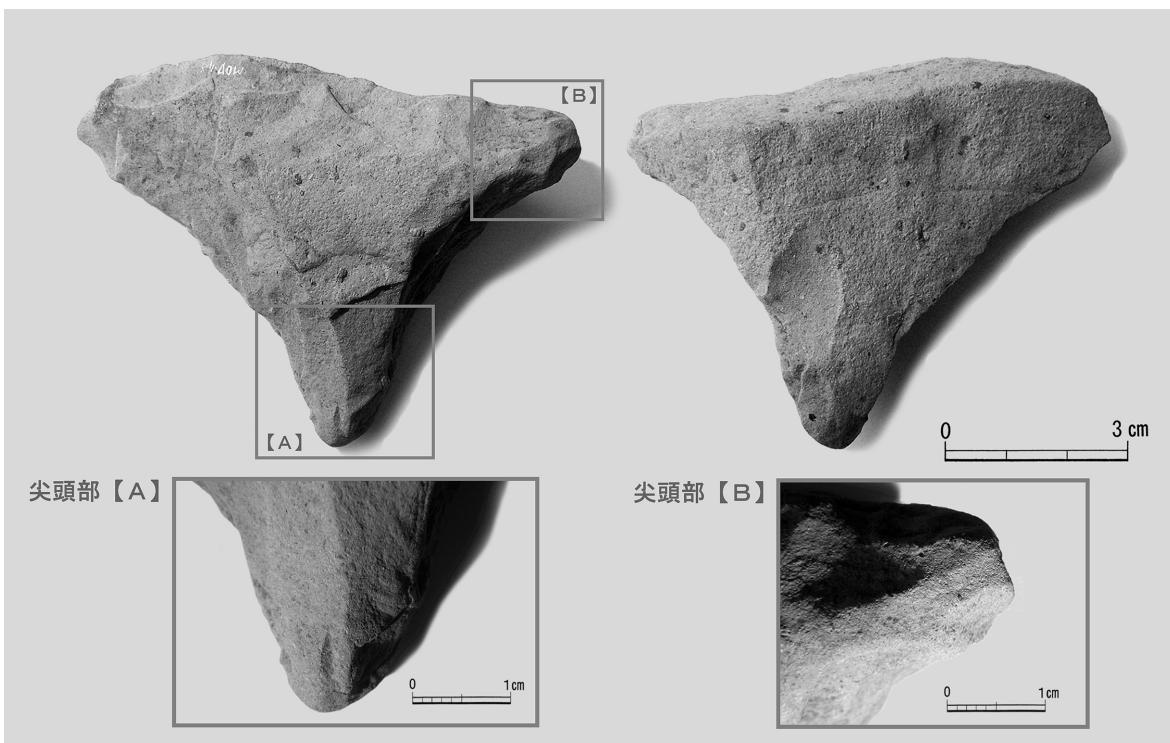
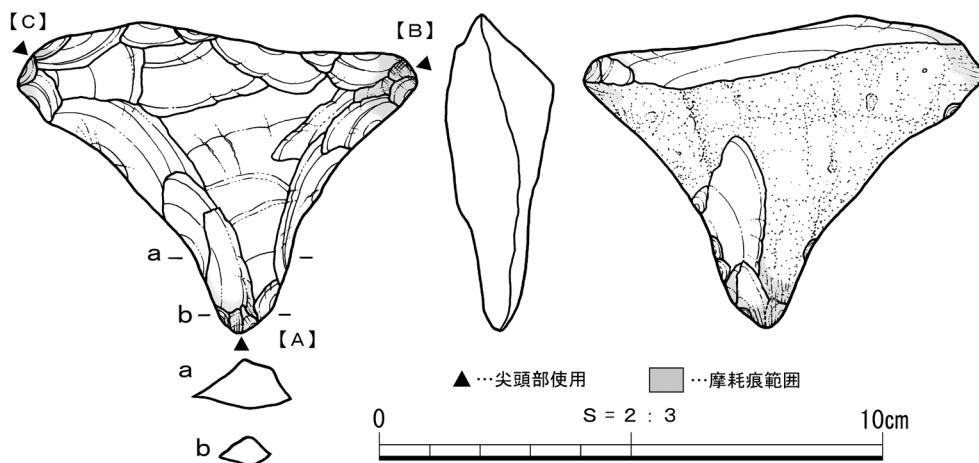


写真3 西山奥谷遺跡出土の尖頭状礫器（愛媛県教育委員会蔵/幸泉撮影）



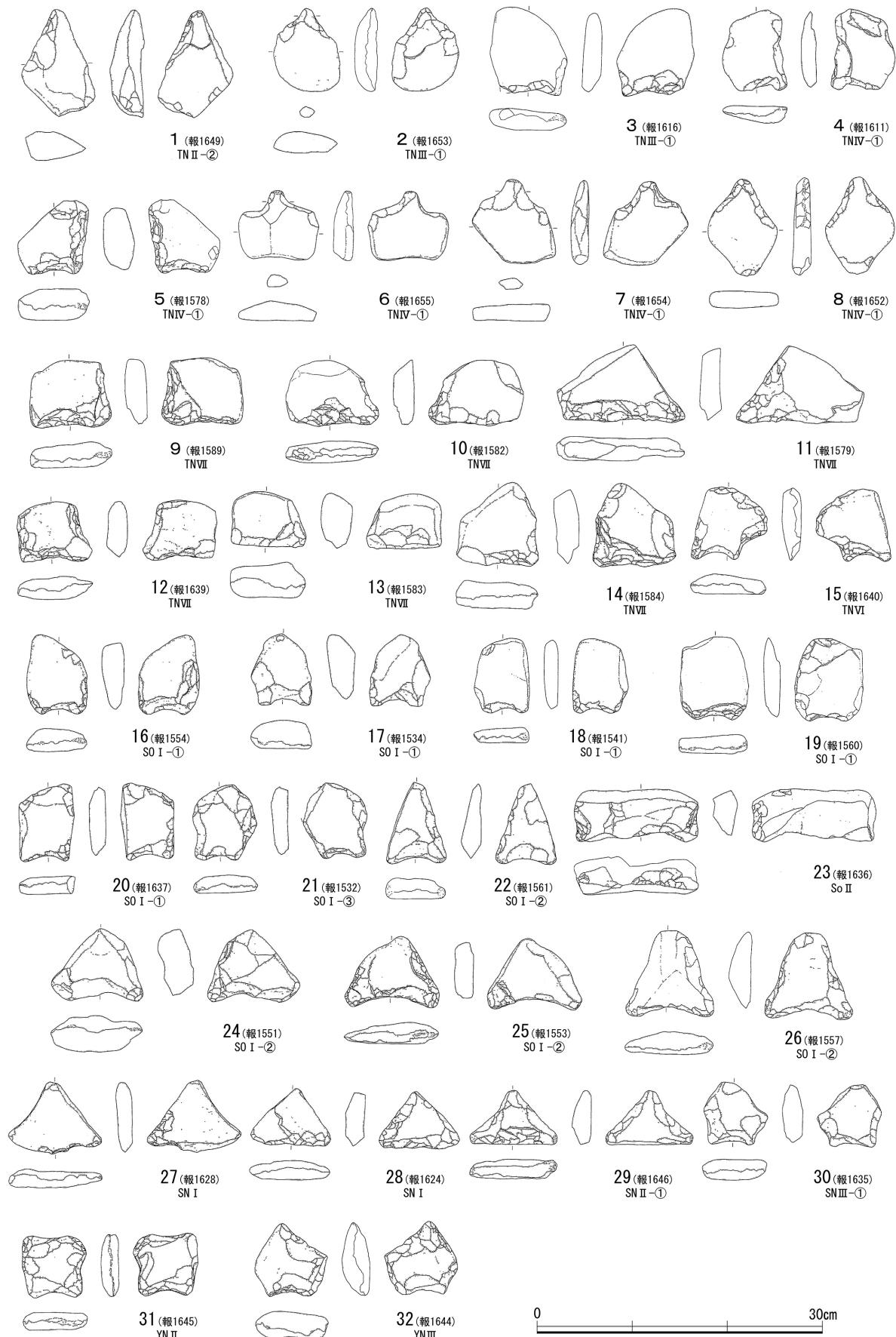
第3図 西山奥谷遺跡出土の尖頭状礫器（愛媛県教育委員会蔵/幸泉実測）

池尻編2012、沖野・沖野2017ほか)である。平面は略三角形を呈しており、三頭系のSN I群に分類できる。主要の使用領域は尖頭部【A】、【B】の二箇所で、各々先端部の幅を15mm以下、厚さ10mm以下に整形されている。図示する通り、【A】、【B】の刃縁には先端部より約2cm以内の局部的な摩耗痕が発達する。加えて、同範囲内には長軸方向および右斜め下方向を原則とする斜位の淡い線状痕が表面を中心で遺存している(写真3【A】・【B】)。光沢痕や敲打(潰れ)痕、微細剝離痕の類は生じていない。また【A】と【B】、【A】と【C】を結ぶ内弯腹縁部にも使用痕は認められないことから、後述するような単頭系と双頭系の融合型とは認定できない。

尖頭部【C】は作出が弱く、幅2cm程度に調整されている。本来、基部を意識した双頭系を範型に製作された可能性も思料されるが、図示する通り、この【C】にも若干の摩耗痕と線状痕が看取できている。略三角形という平面形状から、結果的に【C】も尖頭状礫器を意識しつつ若干使用されたことを示唆しよう。

これらの態様からは礫器を固定するような柄や保持具は存在せず、手持ちによる三方任意の敲打具としての用途が想起されよう。さらに各尖頭部以外には使用痕が存在しないことから、衝撃は尖頭部の刃縁のみで全て吸収できる程度であったことが明白である。左記内容は、被対象物への局所的な敲打、しかも、石器本体が損耗しない程度の加撃行為が繰り返されていたことを示唆している。また使用痕の態様から、被対象物はその加撃行為によって大小破碎し、礫器の各尖頭部に摩耗や線状痕を与えたということになる。

以上を総合すれば、当該尖頭状礫器の被対象物は広範囲に広がる砂礫や土壤といった土地、あるいは肉や木といった物体が対象ではなく、破碎可能な貝殻等の小固形物ということになろう。従って学史的な見解通り、岩礁棲貝類捕採後の処理具として用いられた蓋然性が最も高いということになる⁷⁾。



第4図 山口県田ノ浦遺跡における縄文包含層出土の尖頭状礫器(谷口編2011より一部再編)

5. 類例の検証

(1) 山口県田ノ浦遺跡の尖頭状礫器

つづく第4図には、周防灘を介した熊毛半島の先端、山口県上関町田ノ浦遺跡縄文包含層出土の尖頭状礫器を分類、掲載した。冒頭の学史でも触れた通り、同遺跡からは200点以上の尖頭状礫器が出土している(谷口編2011)。これまでの認識からすれば、想定外の多量出土であった。

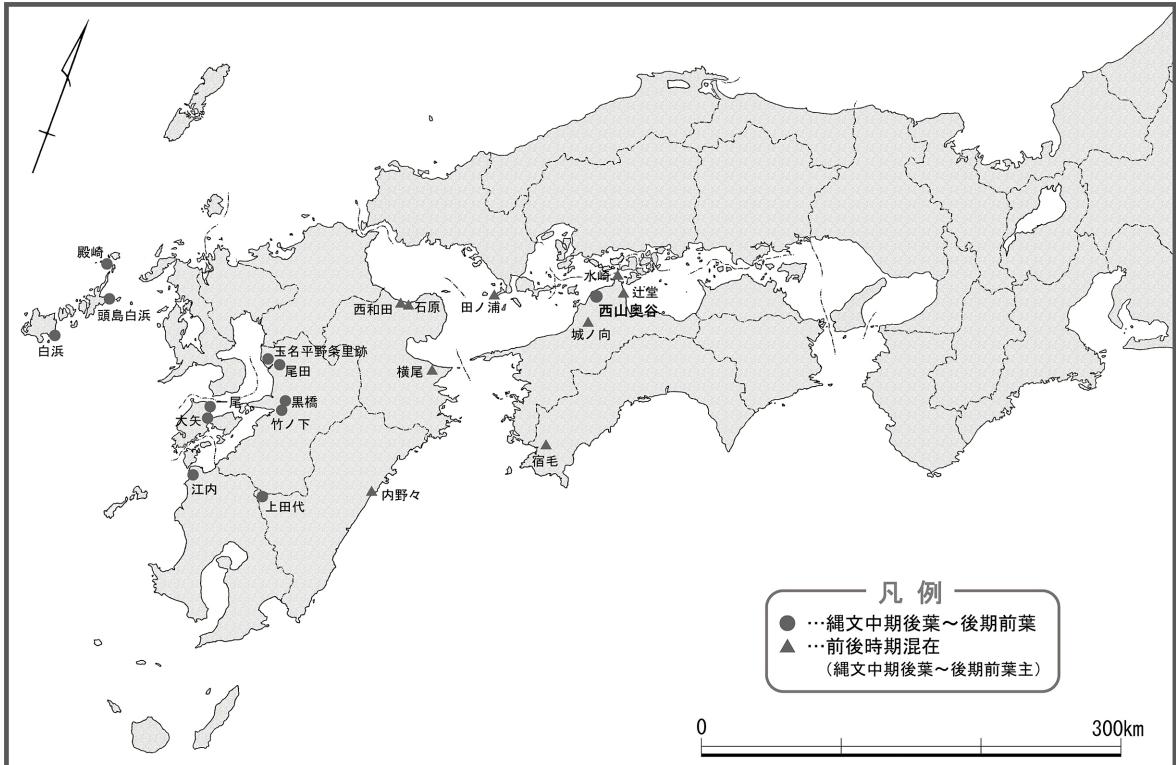
このうち旧浜堤北側に設定された20・21区の下部、縄文包含層出土例は合計72点である。多種多様な尖頭状礫器が出土している。伴出土器は縄文前期初頭～晚期後葉までと幅広いが、主体は縄文中期末葉～後期前葉までであり、他の時期は少量である。内訳は単頭系のTNIV-①型15.3%、TNVII群13.9%、TNIII-①型11.1%、TNIII-②型6.9%、TNVI群5.6%、TNII群4.2%、双頭系ではSOI-①型11.1%、SOI-②型6.9%、SOII群6.9%、SOI-③型4.2%、三頭系ではSNI～III群が各2.8% (三頭系合計8.4%)であった。つまり、田ノ浦遺跡の縄文包含層ではTNIV-①型とTNIII-①型、TNVII群、SOI-①型が主要器種といえるだろう。このほか稀少種として、明確な尖頭部を作出しないTNI群、四頭系のYNII・III群(第4図31・32)、五頭系のGTII群も認められた。うち四～五頭系は上部の弥生包含層からも出土しており、現状では断定が難しいが、縄文後期中葉～晚期への帰属、あるいは弥生包含層(弥生前期～中期前葉)からの混入の可能性を指摘しておきたい。

西山奥谷遺跡例と通ずる三頭系SNI・II群については客体的であるが、合計で5.6%の組成率が窺える。以下、第4図27～29についても補足しておこう。いずれも縄文包含層出土であり、うち27・29は下部の「縄文3」、28は上部の「縄文」層より出土している。下部層では前期の割合が若干増すとされるが、いずれも主体は縄文中期末葉～後期前葉で変化はない。石材も全て在地産の讃岐岩質安山岩である。27は全長7.6cm、全幅9.9cm、重量127.1g、手擦れによる摩耗痕が全面に亘るが、使用痕は三方の尖頭部のみである。28は全長6.0cm、全幅8.5cm、重量109.4gで、使用痕は同じく尖頭部のみであり、内弯(腹縁)部には及ばない。29は全長5.7cm、全幅9.2cm、重量108.5g、この29のみ、尖頭部のほか内弯(腹縁)部にも使用痕が看取できる。

(2) 縄文中期後葉～後期前葉における関連遺跡の分布

つづく第5図には、尖頭状礫器の分布図を掲げた。ここでは、西山奥谷遺跡例と連関する中期後葉～後期前葉併行の諸遺跡(●印)、並びにその可能性がもたれるものの時期比定が困難な遺跡例(▲印)を抽出し、作成している⁸⁾。

当該時期においても、分布の中心が九州西海岸域にあることは自明であろう。さらに第2図で示した分類基準をもとに出土事例を分別していくと、西山奥谷遺跡出土のSNI群(第3図)や田ノ浦遺跡出土の諸例(第4図)と同系統ないし類縁関係にある礫器は九州西海岸の諸遺跡で把握可能である。熊本県城南町黒橋貝塚ではSOI群やSNIV群とともにSNI群とSNII群(高木・村崎1998)が認められる。天草市(旧本渡市)大矢遺跡でもSNII群が(山崎1991)、長崎県小值賀町殿崎遺跡ではTNVII群とSOIII群(福田編1986)、熊本県玉名市尾田貝塚ではTNIV・VII・VIII群とSOI群、三頭系のSNIII群が(坂田編1974・田辺・坂田編1981)、さらに五和町一尾貝塚の下部II層ではTNI、



第5図 縄文中期後葉～後期前葉における尖頭状礫器出土遺跡の分布

SO I ~ III群の出土を確認できる(山崎編2000)⁹⁾。

東九州大分県域では、別府湾南岸の大分市横尾貝塚でTN I -①b型とTN II -①a型が(塩地ほか編2008)、また周防灘に面した宇佐市西和田貝塚ではTN II -①a型の出土が報告されているが(坂本編1979)、海浜部における良好な遺跡事例は非常に少なく、実態は不明瞭なままである。

対する四国地方では、長らく縄文時代に関する帰属時期の明確な事例が皆無であった。このため、本格的な検証が留保されがちであったが、1975年採集の水崎(大角鼻海岸)遺跡における尖頭状礫器はSO I -②型を示している(第1図:木村1975)。帰属時期は縄文前期後葉～後期前葉と幅広いが、西山奥谷遺跡出土のSN I、II群とは型式学的にみて類縁していよう。高知県宿毛市の宿毛貝塚では1986年の2次調査におけるTR 2区第Ⅲ層より、単頭系のTN IV -①a型が出土している(木村1995)。同Ⅲ層は攪乱層とされるため正確な帰属時期は不明とされるが、周辺地点出土の土器から縄文後期前～中葉の間に収まる可能性が高いであろう。

以上を総合するならば、まず九州西海岸域では縄文中期後葉～後期初頭の時期に再び尖頭状礫器が増大することが確実視できる。この時期では前期以来の単頭系、双頭系に加えて、両者の折衷型を成す三頭系のSN I・II群や自然礫の角部を尖頭部に加工するTN VII群、双頭系と単頭系が折衷したSO III群などの派生型の出現が看取された。さらに周防灘を介した熊毛半島の先端、田ノ浦遺跡では既述の通りTN I～III群、TN IV -①型、TN VI・VII群、SO I・II群、SN I～III群、YN II・III群、GT II群と、大量かつ極めてバリエント豊富な尖頭状礫器群が出土していた。西山奥谷遺跡とも近接した時期が想定される一群である。

宿毛貝塚については東九州とは別に、豊後水道を介した東南九州経由の可能性も否定はできな

い。宮崎県高鍋町の下耳切第3遺跡では、前段にあたる縄文中期前～中葉(船元II～III式併行)段階のTN I～III・VII群に属する尖頭状礫器が複数出土(今塩屋編2006)、また宮崎県都農町内野々遺跡でも後期前～中葉段階に属するTN III-①型とTN IV-①型が出土しているからである(小船井編2011)。西南四国域については、今後一層の精査と類例增加が待たれるところである。

ともあれ、四国地方における尖頭状礫器の出現は、九州西海岸で縄文中期後葉～後期前葉の時期に機能的な分派が認められたSN I・II群等の礫器群が、東九州へと伝播したことに起因する可能性が高いであろう。問題となるのは、西北四国への伝播経路である。北部九州玄界灘を介した臨海北回りルート、あるいは南九州、日向灘を介した臨海南回りルートがまず、想起されるところだが、これらの軌跡上に三頭系の尖頭状礫器は見当たらない。近年、宮崎県域では東九州自動車道の建設等に伴って多数の緊急発掘が実施され、旧石器時代由来の礫器が縄文晩期にまで陸続と継承される実態が明確となりつつあるが、上記の如く、TN各群(TN I～III・VII群)どまりであって、本稿諸例のような明瞭な尖頭部を発達させることが稀なまま、晩期を迎えている。このことは西南四国～南四国側でも同様であろう。すなわち、西北四国にみる尖頭状礫器は第5図の分布状況が示す通り、中九州臨海域より阿蘇、九州山地を経て東九州へとダイレクトに伝播した一群に由来する可能性が高いと判断される。つまりその担い手は、必ずしも舟への依存度の高い漁撈集団によるものではなかったことを暗示しているのである。

6. 成果とまとめ

以上、本稿では愛媛県西山奥谷遺跡における尖頭状礫器の把握を契機に広く、前後時期の関連石器を検討してきた結果、四国地方への導入開始時期として縄文中期末～後期初頭前後の可能性をまず指摘するに至った。

別途、筆者等は本誌上で西山奥谷遺跡出土の未公開縄文土器群を検討する機会に恵まれたが、その成果の一つとして、東九州由来の西和田式土器片の発見を挙げている(写真4：幸泉ほか2022)。東九州側では、既に四国側からの影響を示す沈線文系の独立区画文類型等が複数存在するわけだが(幸泉1999・2006ほか)、今回の西和田式の発見により、縄文中期終末～後期初頭の時期に東九州と西北四国域との互恵的な地域間関係の成立が把握可能となったわけである。

こうした状況のもと、尖頭状礫器が突如、西方より流入してくる事実には、実に興味深いものがある。他にも、この前後の西四国域ではTN IV群やSN II群の存在が把握できているが、今回の一連の検証によって、それらの

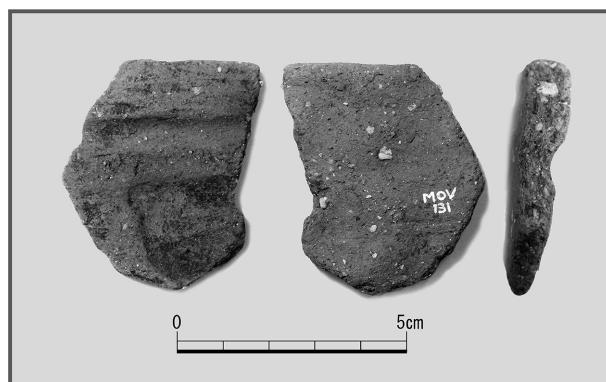


写真4 愛媛県西山奥谷遺跡出土の西和田式土器
(愛媛県教育委員会蔵/幸泉撮影)

発信源が九州西海岸側にあること、及び阿蘇、九州山地から豊後水道、周防灘を経た西からの直接的影響を新たに認識できた意義は大きい。

縄文時代後期初頭、西日本は広く磨消縄文系中津式土器の分布で覆われる。従来、この後期初頭の成立に際しては、東日本からの文化複合体の西漸ばかりが強調されてきた(渡辺1965・1975・1983、家根1992、矢野2016ほか)。そしてその学史的動勢から、愛媛県域においても関連する東日本由来の物質文化や事象の出現経緯のみが注視されやすい傾向が長らく継承されてきた感が否めない。しかしながら、近年では逆に西から東への文化影響も議論されはじめている。例えば、中津式や北白川C式に関しては西日本で成立したのち関東地方にまで影響を与え、後期初頭の称名寺式成立に深く関与していた可能性が指摘されており、当該期前後をめぐる西から東への文化影響の実態についても、改めて学界の関心が高まりつつある(石井2016、加納2020ほか)。

本稿で扱った尖頭状礫器の西からの伝播事象もまた、後期初頭前後を境としていた。このことは当該時期に誕生した広域間ネットワークが、単に東からの一方向的なインパクトによるものだけではなく、西からの文化影響を含めた周辺地域間の互恵的な関係構築に基づいていたことを明示していよう。

以上のように西と東の様々な文化要素の融合、あるいは異系の様々な文化の複合化が許容され、やがて、その象徴ともいえる磨消縄文系土器文化が広く列島全土を覆い尽くしたというのが縄文後期初頭前後の姿なのである。こうした歴史的大画期を促した原動力として、従来の地縁的かつ小規模な地域間関係を解体可能にするほどの新たな生業形態の導入や物流網の形成、あるいは精神文化的な新思想の流入と変容が予想されるわけだが、これらを正しく理解するためには、なおも、幾多の関連事象への追究が不可欠となろう。

西山奥谷遺跡で見出された尖頭状礫器は、こうした地方間関係の変化の一端を象徴するものであった。帰属時期が後期初頭の中津I式最古段階前後に限定できる意味で特に学術的価値が高いと考え、本誌に寄稿する次第である¹⁰⁾。

(2022年8月30日)

註

- (1)ここでは磨消縄文完成直後の段階に対して、2008年の石田由紀子による「中津(式)成立期」(石田由紀子2008)の表現とを区別して、特に「中津I式成立期」とする(幸泉ほか2022)。既存の編年観でいうところの中津I式古段階のうち最古相にあたる。筆者の統一編年Stage 3最古相に相当する(幸泉2017ほか)。
- (2)近年、宮崎県北部に位置する延岡市吉野第2遺跡のA地点第V層(縄文早期前～後葉包含層)より尖頭部を伴う礫器が出土しており(日高編2007)、縄文早期における礫器の評価が改めて急がれるところである。
- (3)岡本健児は押鷹山貝塚出土の尖頭状礫器について、1968年の時点で既に次のように述べている。「先端のとがった所を利用して、カキの殻を割り、岩石からカキを剥ぎとり、またカキの実をとるための鉤(かぎ)の用をなす石器でないかと考えている。このような石器はその類例がない。しいて石器としての名をつければ鉤様石器としなければなるまい。本貝塚がカキを主とすることと考えあわせれば面白い事象である」(岡本1968,p5-6)。
- (4)尖頭状礫器の刃部における摩耗等の使用痕範囲の在り方から、江坂の土掘具説は松藤和人によって明確に否定されている(松藤1987,p35)。
- (5)多田は、水崎遺跡採集の未公開資料の中に双角式(双頭系)1点が存在すると述べているが、本例との関係は

明らかではない(多田2015,p51)。

(6)報告では「漁労にかかる道具であることは明らか」とされ、長崎県「島原地域を中心とする漁労具」を介した、九州由来の採捕具と結論付けられている(谷口編2011,p219・267)。

(7)ただし西山奥谷遺跡は標高82～85mの山間部に位置している。海岸への最短直線距離も約2km程度あり、その往来は充分に可能とはいえる、当該礫器の用途を貝類の採捕に限定すべきか否かは、なおも慎重を期するべきかもしれない。同じことは、弥生後期前後(弥生中期後葉～後期前葉)における山間高所部に形成された愛媛県押鷹山貝塚や、通り山遺跡(愛媛大学考古学研究室編2009)でもいえることだろう。海岸部で使用されると予想される貝類捕採具と、集落周辺で使用される貝類処理具を分けた議論が存在しない点からも、今後一層の研究の深化が望まれよう。

(8)▲印の遺跡を加味したのは、現状ではまだ対象資料が限られるためである。愛媛県水崎遺跡、山口県田ノ浦遺跡、大分県石原貝塚、横尾貝塚、高知県宿毛貝塚などを掲げた。何れも礫器群の帰属時期を特定型式にまで絞ることが困難な一群である。

(9)なかでも黒橋貝塚では中期後葉～後期初頭段階、すなわち愛媛県西山奥谷遺跡とほぼ併行する時期の、三頭系SN I群の尖頭状礫器が出土している(高木・村崎1998,p186No.265等)。

(10)厳密に評価するならば、縄文中期最終末～中津I式新段階までの、型式学的にみて連続した4段階程度の内への帰属である(西山奥谷I期・同II期古～新・同III期：幸泉ほか2022)。もっとも中期最終末と中津I式新段階に属する土器片は僅かであって、同石器に関してもひとまず、中津I式最古段階に付随した可能性が最も高いと判断してよいだろう。

参考文献

- 阿部常樹ほか編 2004『深堀遺跡』長崎市教育委員会
- 安楽 勉 1982「礫器」「堂崎遺跡」長崎県教育委員会 36-59頁
- 池水寛治・長野真一・旭 慶男・大塚閏一編 1979『莊貝塚』鹿児島県出水市教育委員会
- 石井龍彦 2009「西瀬戸内地域の石器石材利用の様相」「考古学ジャーナル』No.594、ニュー・サイエンス社 13-16頁
- 石井 寛 2016「関東南西部の称名寺式土器」「称名寺貝塚と称名寺式土器」横浜市歴史博物館 72-84頁
- 石田由紀子 2008「中津式・福田K II式土器」「総覧縄文土器」アム・プロモーション 634-641頁
- 加納 実 2020「千葉市若葉区餅ヶ崎遺跡における異質な土器群－近畿地方北白川C式系土器群の紹介を中心にして－」「貝塚博物館紀要」第46号、千葉市立加曾利貝塚博物館 1-6頁
- 犬飼徹夫・長井数秋・八木武弘・岡田敏彦・西田栄・吉本拡 1986「縄文時代遺跡解説」「愛媛県史 資料編考古」愛媛県史編纂委員会 43-136頁
- 今塩屋毅行編 2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
- 岩田亮之・宇藤栄晃・幸泉満夫 2018「愛媛県周辺域における未公開縄文土器群の研究(2)－文化財保管庫に埋もれていた博物館資料の再整理を通じて－」「人文学論叢』第20号、愛媛大学人文学会 85-92頁
- 江坂輝彌 1968「熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について」「日本民族と南方文化」金関丈夫博士古稀記念委員会編/平凡社 89-92頁
- 愛媛大学法文学部考古学研究室編 2009『押鷹山貝塚II』愛媛大学法文学部考古学研究室・宇和島市教育委員会
- 愛媛大学法文学部考古学研究室編 2010『押鷹山貝塚と西南四国の弥生文化』第11回愛媛大学考古学研究室公開シンポジウム資料集
- 岡本健児 1968「愛媛県宇和町深ヶ川の弥生土器と宇和島市押鷹山貝塚」「西四国』第2号、西四国郷土研究会 2-6頁
- 沖野新一・沖野 実 2017「松山平野周辺の讃岐岩質安山岩(サヌキトイド)－考古学的踏査による主要産地の概要

- 』『紀要愛媛』第13号、愛媛県埋蔵文化財センター 1-14頁
 賀川光夫 1969a 「礫石器の下限」『古代文化』第21卷第7号、古代學協會 169-174頁
 賀川光夫 1969b 「縄文早期の礫器」『古代文化』第21卷第12号、古代學協會 265-272頁
 堅田 直編 1983 『高山寺貝塚発掘調査概要』和歌山県田辺市教育委員会
 木村剛朗 1975 「愛媛県越智郡大角鼻海岸採集の石器とその考察」『西四国』第5号、西四国郷土研究会 30-36頁
 木村剛朗 1995 『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研
 九州縄文研究会編 2009 『九州における縄文時代の漁撈具』第19回九州縄文研究會長崎大会資料集
 饗 昭志編 1984 『沖ノ原遺跡』熊本県五和町教育委員会
 児玉洋志 2009 「拝鷹山貝塚出土の石器使用痕分析」『拝鷹山貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学研究室 111-118頁
 幸泉満夫 1999 「西瀬戸内における九州系縄文土器」『眞朱』第3号、徳島県埋蔵文化財センター 1-12頁
 幸泉満夫 2005 「中期末の調査と成果」『大柿遺跡(町道光下新町線)』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 29-75頁
 幸泉満夫 2006 「西日本沈線文系土器集成 I」『研究報告』第32号、山口県立山口博物館 67-86頁
 幸泉満夫 2016 「縄文土器にみるもう一つの地域間交流 -Stage 1: 縄文中期末～後期初頭併行期を事例として-」
 　『中四国地方における縄文時代の地域間交流』中四国縄文研究会 9-25頁
 幸泉満夫 2017 「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究 1 -北部九州沿岸域における“文様のない粗製深鉢群”的再検証-」『古文化談叢』第79集、九州古文化研究会 57-118頁
 幸泉満夫 2021 『鳥浜貝塚発見60周年記念講演会 II 対馬暖流ベルト地帯と縄文農耕関連具の出現』福井県立若狭歴史博物館記念講演会資料 1-18頁
 幸泉満夫・高木朋美・前田友香・畠中航志・菅百恵 2022 「四国地方における中津 I 式土器成立期の一様相 - 愛媛県西山奥谷遺跡出土の縄文土器群を中心に-」『愛媛考古学』第26号、愛媛考古学協会(本誌同時掲載)
 小船井順編 2011 『内野々遺跡・内野々第2・第3遺跡・内野々第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
 坂田邦洋編 1973 『江湖貝塚 -曾畠式土器に関する研究-』長崎大学医学部解剖学第二教室
 坂田邦洋編 1974 『曾畠式土器に関する研究 尾田貝塚』縄文文化研究会
 坂田邦洋編 1979 『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』別府大学考古学研究室
 坂本嘉弘編 1979 『石原貝塚・西和田貝塚』大分県教育委員会・宇佐市教育委員会
 塩地潤一・松永正大・古川 匠編 2008 『横尾貝塚』大分市教育委員会
 高木正文・村崎孝宏編 1998 『黒橋貝塚』熊本県教育委員会
 高野晋司 1980 「礫器について」『串島遺跡』長崎県教育委員会 83-93頁
 多田 仁 2015 「西南四国における縄文時代の貝類採補具」『愛媛考古学』第21号、愛媛考古学協会 45-52頁
 多田 仁 2018 「第3章第3節 集落と生業 嘴状礫器」『愛南町史』愛南町町史編纂委員会 61-62頁
 橋 昌信 1967 「石器」『深堀遺跡』長崎大学医学部解剖学第二教室 98-101頁
 田中良之 1982 「磨消縄文土器伝播のプロセス - 中九州を中心として-」『古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 59-96頁
 田辺哲夫・坂田邦洋編 1981 『尾田貝塚』広雅堂
 谷口哲一編 2011 『田ノ浦遺跡 II』山口県埋蔵文化財センター
 中四国縄文研究会徳島実行委員会編 2004 『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会
 中四国縄文研究会山口実行委員会編 2007 『縄文後晩期の西部瀬戸内地方』中四国縄文研究会
 筒井三菜編 2001 『具同中山遺跡群IV』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 富田紘一・松舟博満編 1989 『椎ノ木崎試掘調査報告書』熊本県牛深市教育委員会
 日高広人編 2007 『吉野第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター

秀島貞康編 1994 『山野宗方遺跡』長崎県諫早市教育委員会
廣瀬岳志 2009 「宇和島湾及びその周辺における貝類採集活動について」『拝鷹山貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学
研究室 119-122頁
廣田佳久・山本哲也編 1986 『宿毛貝塚発掘調査報告書』高知県教育委員会
福田一志編 1986 『殿崎遺跡』長崎県教育委員会
町田利幸 1982 「礫器」『堂崎遺跡』長崎県教育委員会 36-59頁
町田利幸 1984 「III(3) 石器」『今福遺跡1』長崎県教育委員会 79-115頁
松藤和人 1987 「双角状石器考」『考古学と地域文化』同志社大学考古学研究室 23-40頁
眞鍋昭文・池尻伸吾編 2012 『西山奥谷遺跡2次』愛媛県埋蔵文化財調査センター
宮地聰一郎 2022 『西日本縄文時代晩期の土器型式圏と遺跡群』雄山閣
武藤洋行・村上恭通 2009 「西南四国地域における嘴状礫器の様相」『拝鷹山貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学研究
室 99-110頁
村上恭通 2009 「嘴状礫器に関する若干の考察」『拝鷹山貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学研究室 91-98頁
守田五男・八木武弘ほか編 1977 『水崎遺跡』波方町教育委員会
守田五男・八木武弘編 1985 『七五三ヶ浦遺跡』波方町教育委員会
家根祥多 1992 「定住化と採集活動」『新版 古代の日本』第5巻、角川書店 51-72頁
矢野健一 2016 『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社
八幡一郎・賀川光夫編 1955 『早水台』大分県教育委員会
山崎純男 1975 「九州地方における貝塚研究の諸問題」『九州考古学の諸問題』東出版社 131-165頁
山崎純男 1991 「第1章第一節二 縄文時代」『本渡市史』熊本県本渡市史編さん委員会 49-119頁
山崎純男編 2000 『一尾貝塚』熊本県五和町教育委員会
吉田 寛・坂本嘉弘 1997 『下原遺跡』大分県教育委員会
渡辺 誠 1965 「綾式土器の様式構造」「あるかいあ」第6号、三考会 4-10頁
渡辺 誠 1975 「第5章第3節 縄文農耕論への新しい視角」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育
委員会 317-320頁
渡辺 誠 1983 『縄文時代の知識』東京美術

挿図版典拠

第1図：木村1975より再編。第2・3・5図：幸泉作成。第4図：谷口編2011より再編。写真1～4：幸泉撮影・
レイアウト（各掲載許可済）。

本論文の内容には、令和三～四年度におけるJSPS日本学術振興会科学研究費19K01097（基盤研究C）助成事業
「対馬暖流ベルト地帯周辺における縄文農耕の実証化に向けた関連石器類の広域基盤研究」（研究代表者：幸泉満
夫）と連関した研究成果の一部が含まれている。扁平打製石器類の成立起源を探る目的から各地の縄文礫器の比
較調査を重ねるうちに、対馬暖流ベルト地帯の南外縁部に並立する、仮称「中九州・豊後水道ベルト地帯」の存在
を見出した。本稿はその一端を示す尖頭状礫器に関する予備的考察を意図している。